

『戦場に輝くベガ』を観ての感想

井上圭典

映画の感想と批評とが違うことは言うまでもない。批評には、ある基準なり物差しがあってそれを作品に当てはめて、作品の出来を評価するようである。この批評は、批評する人物の映画論が露わになるので、恐ろしい作業である。私のような、映画を楽しむだけの者、そもそも映画とは何かと考えたことのない者に批評はできない。

以下は感想である。

◇

感想といえども観る人がどこに立っているか、その視点からみでの感想になる。それで私が何者であるかを語ることから始めた方がよいと考える。

『戦場に輝くベガ』には海軍水路部編暦課が戦時刊行した『高度方位暦』が登場する。海軍水路部は海軍は解体されたあとも、戦後水路部となって平和的な業務を受け持つことになる。私は水路部編暦課で仕事をした一員である。編暦課の仕事は一般官庁と同様、社会の変動に従って作業内容が変遷する。その中でも戦前から引き継いだ仕事に(a)『天体位置表』、(b)『天測暦』、(c)『天測計算表』、(d)『天測略暦』、(e)『簡易天測表』、(f)その他、の刊行がある。私は(a)～(f)までの全部の計算・編集に関わってきた。これら刊行物が、何を目的に作られ、どのように使うかを知る立場にあった。

『高度方位暦』は戦局が緊迫した時期の航空作戦専用のものであったので、戦後刊行は中止された。しかし戦後小型漁船の航海用に改変して数年間出版している。漁港を出て漁場に向かう小型漁船は次第に陸地が見えなくなり自船の位置は天測に頼ることになる。『太陽高度方位暦』はそのためのものである。漁を終え港に向かい、陸地が見えるまでこれに頼っていた。天測航法と沿岸航法とを併用したものである。沿岸航法は広く地文航法と呼ばれている航法に属する。その後、南極観測が始まると、『南極用高度方位暦』が作製された。これは昭和基地における太陽が地平線上にある期間の高度方位暦である。南極観測隊には必要不可欠な暦である。これは「暦の設計思想」というものがあるとすれば、戦時下の『高度方位暦』と同一思想のもとに作られたものである。特定の地点の高度方位が掲載された暦である。

ついでに上記刊行物の流れ図的なものを書いておく。(a)を計算して、その計算資源を用いて(b)、(d)が計算される。(c)は高度方位を計算するための数値表、(e)は高度方位を読み取る表である。航海士は(b)と(c)とを併用するか、(d)と(e)とを併用するように作られている。しかし、用途は限定されず(b)はアマチュア天文家に利用される内容を備えている。星座盤には月・惑星の位置は記されていないが、(b)から惑星の位置を知って星座盤にシールを貼れば、ちょっとした即席プラネタリウムとなる。

◇これから本題に入る。

・『戦場に輝くベガ』を観て2、3日考え続けたことは、「人は何故星を見続けるのか」、「国は何故戦争をするのか」、「男と女は何故引きつけ合うのか」、「歴史認識を深めることのプ

ラス面とマイナス面」、「国家のありようが個人の運命を支配する。その功罪」などである。そしていずれも自分で納得できる解答を見いだせない難問であることが改めてわかった。「わからない」ということが「わかった」のである。

「人は何故星を見続けるのか」に対しては、そのことの故に、人類は夥しい数の天文民話・神話が生み出したとしか言えない。

「国は何故戦争をするのか」に対しては、人が猛獣から身を守ったのは集団の力と知恵とを結集したからで、それ故にこの集団への帰属意識が強められ、この力が他の人間の集団との生存をかけた争いにまで及ぼし始めたことが、淵源にあるのではないかと考えている。国家の命に従うのが自己保存の道でもある。多少の犠牲はまさに生け贄、人柱で仕方がない。それが自分になる可能性、リスクを常に秘めつつ国家に命を託する。

「男と女は何故引きつけ合うのか」に対しては、文学の永遠のテーマであるとしか言いようがない。解答を「文学」に丸投げするしかない。戦時下であっても男と女は引きつけ合うという、より上位というか、根源的な力が働いていることはこの映画でも主張している。私もそう思う。

「歴史認識を深めることのプラス面とマイナス面」に対しては、「自虐史観」と「自慢史観」との対立が何を生み出すか、そのプラス面とマイナス面を考察対象としたということである。この論争は止めてはならないが、その収束に国家が介入することの危険性を強く憂えている。この映画は史実を伝える客観的な視点に立つ歴史記録だと考える。どちらの史観に立ったものではない。

「国家のありようが個人の運命を支配する。その功罪」に対しては、その事実の存在することが認められるが、その運命の分かれ道に立たされた個人の「選択の自由の幅」について考えた。映画の久子には選択の自由は、動員令に従うか、退学の道しか残されていない。退学したら挺身隊として動員され結局逃げられないが)。和夫は、徴兵延期の特権を失ったが、かねてからあこがれであった飛行機乗りの道を選択する。他の道に進んだら、この映画が成り立たない。映画は成り立たないが、和夫には違った運命が待ちかまえていたことはありうる。

国家が戦争への舵を切った場合、個人の将来への選択の道は平時に比べ、極端に狭くなる。文字通り国家と国民は運命共同体となる。

◇

一観客としての映画を観ている最中と直後の感想を私自身の体験を交え以下に記します。

・冒頭の児童が歌う「七夕の歌」の輪の中に、和夫、久子が入っているのでしょうか。幼なじみの情景が歌と共に語られているようです。私の長女が幼稚園児のとき「五色（ゴシキ）の短冊、私が書いた」と大声でよく歌っていたことを思い出し、大変懐かしく感じました。家内も同じ感慨を持ったと言っておりました。子供3人が幼稚園児の年頃の一家団らんの思い出は、今でも鮮明に脳裏に浮かび、何か胸が締め付けられるような気がしました。映画の最後も七夕の場面でした。映画全体が七夕の括弧で括られていてとても締まって感じ

でした。

この文章を書いている現在でも「笹のさらさら」の歌が基底音として頭の中で鳴り続けております。

・久子は下町育ち、東京大空襲で家が焼けました。私も日本橋で育ち、(小学4, 5年生の頃は有楽町にある毎日新聞社のプラネタリウムに毎月通いました。テーマは月替わりでした。ボール紙を丸めて望遠鏡も作りました。) 昭和20年3月10日の大空襲を近くで経験し、焼け出された人々が着の身着のまま、顔も着物も真っ黒になった姿で、どこを見つめているのか目の焦点が定まらないまま、あてどなく東から西に移動してゆくのを見ました。私たちもその数の多さに圧倒され、呆然と見守るしかありませんでした。続いて4月に空襲があり、さらに続いて5月24日、25日に大空襲があり、25日に私の家も焼失しました。焼け出されて吉祥寺に移住するまでの苦労話がありますが割愛しまし。それで久子の苦悩、和夫の心配も強く共感することができました。

・水路部の建物の写真も、懐かしく、この広場でバレーボールの円陣パス、軟式野球のキャッチボールなどしておりました。定年制が敷かれたあとですが、毎年4月、職員全員がこの広場に集められ整列して定年退職者を見送った場所でもありました。私にとっては貴重な映像ですが、一般の人にとってはこのような建物であったのかと、旧軍隊の建物の一部を見せられたに過ぎないか、建築に興味のある人であれば、それなりの見方をしたであります。

私の記憶によれば、中学3年の時、5年生が9月に卒業し、翌年3月4年生が卒業したと憶えております。久子は私より1, 2年上級生か、和夫は4, 5年上級なのかなと想像しました。私が中学3年の時から勤労働員がいましたが、授業の合間に疎開家屋の解体作業に従事し、授業のある日の午後は学校教練の時間でありました。「査閲」が間近になると教練は大変厳しいものになっていました。久子は海軍水路部に動員されたのです。質は違いますが勤労働員をさせられたことでは同じだなと思いました。

・七夕の物語では、私が教えられた七夕物語と違い、何か、お盆の説話と重なりあっているようで違和感を抱きました。織姫と牛飼とが1年に一度7月7日に逢瀬を楽しむというのが基本にあり、死者の霊魂が生家に戻り1年に1度の会合をするお盆行事であり、それが習合した伝説のようになったもののでしょうか。神話・民話・伝説の類に対して定説はどれかと言うような「神学論争」はあまり生産性のないことです。編暦課の星の友会の総会は7月7日の前後に行われます。起源はもちろん七夕です。映画と共通する場が設定されております。

・「戦場」という題名から戦闘場面はどのように表現するのかが気になっておりました。戦闘場面を連想される激しい爆音の重なり、戦闘員の緊迫したやりとりは、「戦場」が舞台であればなくすることはできないのですが、押さえられるぎりぎりの線にとどまっているので安心しました。生々しい戦闘場面の映像がなくても映画の筋は通っていると思いました。サイパンの飛行場を爆撃し、B29を何機か破壊したのかどうか、史実は知りません。

私は戦争体験はありませんが、日本橋に住んでいたせいか、戦時体験、B29による空襲の被害体験を何回かしております。それを連想しました。それを話始めるとまた脱線してしまいますから書きません。

・航空機の位置を決めるために、訓練中は、ベガ、アークツルス、フォーマルハウトの3恒星、実戦中はベガ、リゲル、フォーマルハウトの3恒星の高度観測をしております。天文航法として最も基本的正統的な方法を語っております。当時の航空機乗りが行う天測方法ですから、航海士も含めこの画面に、違和感を持つとすれば、そんなに簡単に位置は出せないよ、もっと複雑な計算操作の時間が必要だよと言うでしょう。

私もそれは認めます。しかし、観測値と位置決定結果を後から復唱し読み上げたにとらえれば問題ないと思いました。JRの車掌が「指さし連呼」というのですか、〇〇よし、〇〇よしと次々と声をあげて連呼しています。はたからみると一見気でも狂ったとかと思います。人命に関わる仕事をする人の責任感の表れでしょう。

航空機の中で観測データと結果を読み上げることはあり得ることでありましょうし、映画としての「演技」で鑑賞者に納得させる手法であると肯定的にとらえております。

ただ、この場面で久子の計算した『高度方位暦』が登場しないのが淋しいと思いました。和夫のベガの「観測」と久子のベガの「計算」とで航空機の位置が決まるという「有機的」な関係が押し出されていたらよかったかと感じました。映画全体の流れからそれは正しく表現されており、鑑賞者も十分理解できることですが。

・和夫が航空機に持ち込んだ天測用の暦は『高度方位暦』です。正統的な航法に必要な『航空年表』（天測略暦の前身）と『簡易天測表』とを持ち込んだかも知れないが、久子が計算したものは『高度方位暦』ですから、位置決定にはこれを使わないことには、ストーリーが成り立たないし、事実もそうであったとしか考えられません。第一、『航空年表』（天測略暦の前身）と『簡易天測表』は編暦課のルーティン作業で作成済みでした。勤労働員の学生に手伝ってもらう作業ではありません。

軍事的な事柄に深入りしますが、九七式陸攻機、一式陸攻機の搭乗員は5名であったといわれております。「銀河」の搭乗員は3名で、仕事量は同じ、それで天測計算の手間を省くために、正統的な天測法（表引きと計算の繰り返しで高度方位を求める）ではなく、ずばり高度方位を表から引ける『高度方位暦』が生み出されたものです。従来の天文航法に代わる画期的な方法を確立した訳ではありません。

・総合して、この映画は、戦時体験者には、さまざまな思いを引き出す契機となる貴重なものであります。同時に若い人にも強く訴えるものがあるのでしょう。自発的な上映委員会が出来たことが何よりの証拠でしょう。ホームページも立ち上げられました。短時間の映画ですが、余韻がいつまでも続く作品です。観る人に様々な感想を引き出すものを秘めています。事実裏付け得れた画像が説得力を高めているのでしょう。

・学徒勤労働員の作業は何であったかを、改めて問いかけるものでもありました。学業半ばで出陣した学徒兵の記録はかなり多く知られています。戦死が絡んでいるからだと思います。勤労働員者は空襲などで死んでいった者もいますが、戦死の危険性は出陣学徒ほどにはありません。風船爆弾作製を手伝ったり、ウラン鉱石を採掘させられたり、農作業、道路整備を手伝ったりさせられました。動員先がないと言って山中の学校で授業をする訳にはゆかぬと、道路に積み上げた砂利をあちらに運び、また同じ処に戻すということをやられた地方の勤労働員生徒の証言もあります。

・勤労働員生徒と同世代の人に、少年兵がいます。志願して軍に所属しましたが、予科練の生徒ほどには光が当てられていません。当時14、15歳の少年達でした。予科練兵のように最前線には立たされていませんが、例えば通信兵のような働きをしています。